

ふくらく通信

2014年 第4号 12月17日発行
総号数 70 発行人 菅野香織

戦争を知り、平和を考える場

批判の多い靖国神社
(東京都千代田区 九段北)



敷地内に、兵士たちの遺品と当時の戦況資料などを展示している「遊就館」がある。拝観して、こう思った。

平穏な暮らしを失い、家族を思いながら、苦んで死んでいった人々を偲び、どのように戦争が進行し、何が残ったのかを、思い知る。そんな場所だと。

ただし、一部の展示に、意図や戦没者への肩入れが過ぎて、戦争を肯定するかのよう誤解されそうな映像などもある。

(しかし、これも、かつての日本の姿であらう。今では違和感や不快にも思えることが、当時は日本中心の論だったことを知らせているともいえる。

拝観の際は、「こんな時代を繰り返してはならない」という前提で、解釈することが肝要だろう。

仙台市には、戦災復興記念館(青葉区大町)や、歴史民俗資料館(宮城野区榴岡)がある。



仙台空襲や、当時の暮らしぶりなどが分かる展示。歴史民俗資料館は、建物自体が、旧日本軍の兵舎だったため、中にも当時の復元展示の一画がある。

← 仙台歴史民俗資料館。建物自体が文化財。歴史と伝える貴重な場だ。

73年目の12月
戦没者 何を思うか
今を見て

昭和16年、この年の12月8日は、太平洋戦争が始まった日だ。

その当時、外交では何度も危機を繰り返しながらも、戦争回避に努めていたようである。

この粘り強く交渉するやり方は、為政者たちが同調していたら功を奏していたらう。

しかし、外務省などの文官が

和平を求めていた一方

で、軍部は戦意がい

つも前提にあつたようだ。

当時の内閣は、軍が

参与しているため、戦意

を持った軍と、交渉を求

めた文官とで割れていた

という。

軍人も文官も、「国を守る」という信念は同じだったろう。なのに、和平交渉を締め出して内閣を席巻した軍は、いよいよ戦争へと踏み出していく。

当時、国家の大事は天皇の御前会議で決められていた。ところが、天皇陛下の側近のうち、軍部が他の重臣を遠ざけ、軍の意向がどんどん強くなっていくのが、記録などに表われている。

ついに日本軍は、ハワイオアフ島南岸にあるアメリカ軍の修理補給、休養などの拠点、パールハーバーを奇襲。

壮絶な戦争が始まった。

国のためと言いつつ、大勢の無事(むご)の命を奪い合うなど、どうして正義だと思えよう。

あれから73年、戦争を知らない世代が首相になる時代だ。国防のためというつ、危うい道を思わせる法改正に不安がつのる。

今では、戦争を知らないのが、子供だけでなく大人も多くなった。

それでも、体験者の声を聞き、その傷や切実な思いを忘れてはならないと思う。

かつて、夢や希望を諦め、平穏に生きることを叶わず、家族や大切な人を思いながら、苦んで死んでいった人々がいる。

戦争犠牲者の切なる思いを拾えば、決して戦争を受け入れることはできない。

戦争ではなく、平和を尊び交渉できる政治。そういう世の中であるように、そう願ってやまない。

(2007. 2/8公表手記、再編集)